View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

白梅学園大学・短期大学紀要　**54**：55～68（2018）

里親向け研修におけるCAREプログラムの効果の検討

―里子と里親の関係作りに向けたペアレントプログラムの実践―

福丸　由佳*

伊東ゆたか**　　木村　一絵***　　加茂登志子****

要旨：社会的養護を必要とする子どもの数が減少しない我が国では，家庭的養育環境を提供しうる里親家庭に向けた支援が今後さらに重要となると考えられる。本研究では，親・養育者および子どもと関わる大人を対象としたペアレントプログラム，CARE（Child-Adult Relationship Enhancement）を里親に向けて実施し，その意義とプログラムの有効性を検討した。その結果，子どもとかかわるさいに大切なコミュニケーションについて，理論的側面に加えてロールプレイを通して学べる実践的な側面が，里子との関係づくりにある程度役立っていること，また，研修前と研修終了後3か月時点の比較では，習得した内容を意識する頻度が高い場合，里親のストレス軽減や里子との関係の認知に効果があることが示された。さらに，CAREプログラムの中で扱うコミュニケーションスキルを反映させた尺度についても検討を行い，今後の効果研究に向けた課題についても検討した。

キーワード：CARE，里親，里子，ペアレントプログラム，コミュニケーション，養育行動

Ⅰ　問題と目的

1．はじめに

わが国では，少子化が指摘される一方で，社会的養護を必要とする子どもの数は約4万6千人にのぼっており，その数は少子化現象に比して減少しない傾向が示されている。

＊白梅学園大学子ども学部　＊＊帝京大学医学部　＊＊＊九州大学大学院医学研究院保健部門
＊＊＊＊若松こころとひふのクリニック
FUKUMARU Yuka：The Analysis of Effects of the CARE Program for Foster Parents : working towards the improvement of foster parent-child relationship

こうした状況は，子どもや子育てをとりまく問題の複雑さと困難さの表れでもあり，さまざまな方向からの継続的な支援が必要であることを示している。

また，社会的養護を受ける子どもの多くが施設で暮らしており，家庭的な養育環境を提供しうる里親家庭への委託率（里親家庭およびファミリーホームへの委託率）は，全体で 2 割に満たないことも我が国の特徴の一つである（厚生労働省, 2016）。欧米に比べて里親委託が伸展しない状況（湯沢, 2004）については，法律面の遅れ（田中, 2008），社会的養護体制における里親の役割の曖昧さ（木村, 2007），養育里親に対する理解不足（渡邊，2010），質の担保の明確な基準における曖昧さ（尾里, 2015），里親制度についての啓発不足（佐藤, 2009）といった政策的な要因が指摘されている。また, 子どもとの適切な距離を保ちながら，子どもに対する家庭的なケアを行うという難しい役割を担っているにもかかわらず，研修や相談，レスパイトケアの提供など，里親に対する支援そのものが不充分な状況（渡邊,2010 ; 安藤, 2010）や, 里親委託児童の限定という側面からの指摘（三輪, 2016）もあり，その要因は単純ではないことがうかがえる。

2016年の児童福祉法改正を受け，厚生労働省（2016）は家庭的な環境での養育の推進のためにも就学前の子どもの里親委託率を 7 割以上にするという方針を打ち出しているが，それに対して必ずしも十分なケアがなされているとはいえないのが，わが国の現状でもあろう。特に，さまざまな事情によって親元を離れた里子たちが，里親という新たな愛着の対象を得て家庭的な環境の中で育っていくことの大切さが指摘される一方で，里子だけが原家族との間で，ある種の喪失体験を抱えているという特殊性を有することもあり，受託後の関係構築の過程では，問題ともみてとれる里子の行動に直面して里親自身が挫折を味わうことも少なくない。お互いの過去を共有していないという関係の中で，里子たちの今と向き合い，懸命に関係を構築していこうとする里親家庭に向けての様々な支援のありようが，益々問われているといえる。

本研究は，こうした里親家庭のおかれた状況や課題を踏まえ，子どもとの関係を築く際に有効とされるコミュニケーションを大人自身が習得できるよう工夫されたCAREプログラム(Child-Adult Relationship Enhancement)を用いて，その有効性を検証し，里親里子の関係づくりに資するための課題について検討することを目的とした。すでに，福丸（2010）は，里親が日々の里子とのかかわりにおいて，CAREプログラムで扱うコミュニケーションスキルを意識することは，両者の関係性を肯定的にとらえることに影響を持ちうることを示している。本研究では，特に里親のストレス軽減と，肯定的な関係構築の観点からCAREプログラム実践の効果について検討する。

CAREプログラムは，2005年に米国シンシナティ子ども病院で開発された（その開発経緯や内容の詳細は，福丸, 2010; 2013）。米国では，養育者をはじめ，トラウマやマルトリートメントにさらされた子どもたちとかかわる医療・心理・教育・福祉分野の専門家など，2000人を超える大人が，すでにこの研修を受けている（Gurwitch. et.al, 2015）。

また，2016年には，専門家向けのテキストが改訂され，本プログラムが子どもへの危機介入や深刻な問題行動への介入を行うものではなく，子どもの肯定的な行動を促し子どもが従える機会を増やすための基本的なペアレンティングのスキルを扱うものであること，そのスキルは，トラウマに関する豊富な情報と，多くのエビデンスに裏打ちされた複数のペアレンティングプログラムの理論に基づいており，思春期に至るまでのあらゆる年齢の子どもとかかわる際に，すべての大人が幅広く用いることが出来るものであること，が改めて明示されるに至っている（Messer. et.al, 2016）。

プログラムは，全体を通して 4 時間程度で実施できる内容ではあるが，大きく二部から構成されており，子どもとの間に温かい関係を築くためのコミュニケーションを習得する前半部分（具体的には，減らしたいスキル「3 つのK」すなわち，命令　コマンド，質問　クエスチョン，禁止　キンシや否定的な言葉と，増やしたい「3 つのP」すなわち，くり返す　Paraphrase，行動を説明する　Point out，具体的にほめる　Praise specific）と，子どもが従いやすい効果的な指示を大人が習得するための後半部分から構成されている。全体に，理論的背景を学んだうえで，実際にロールプレイを行ってスキルの習得と定着を図ることに重きを置いている点もCAREプログラムの特徴の一つである。近年，児童相談所をはじめとする相談機関や児童養護施設，保育や学校教育の現場など，実践の場も多様な広がりを見せている。

２．本研究の目的

以上のようなプログラムの特徴を踏まえ，本研究では，里親を対象としたCARE研修の実践を元にその評価や効果について検討する。具体的な目的は次の 3 点である。

まず，第一に，プログラムの実施に対する質問紙調査の結果から，その評価について検討を行うことを目的とする。ここでは，CAREプログラム全体への満足度や実施回数など，里親に向けた研修としての評価を概観する。

第二に，実施前後の調査結果から，特に里親のストレスについて，里子との関係性の認知という点を中心に，その変化を検討する。具体的には，こうした心理教育的介入プログラムが，里子と里親の関係作りに有効かどうかを検討するという本研究の目的に鑑み，事前事後の調査の中で，PSI-SF（Parenting Stress Index- Short Form）の結果をもとに，里子との関係性の認知や親自身のストレスという視点からその効果について検討する。

第三に，こうした心理教育的介入プログラムで扱われるコミュニケーションスキルを中心とした親の養育行動を測定する尺度の検討を行う。これは，親の養育行動を測定する尺度はある程度開発されてはいるものの，年齢が乳幼児期に限られるなど限定的なものが少なくないこと（三錮, 2014など），また，一般的な態度を問う項目が多く，CAREのような心理教育プログラムで扱われるコミュニケーションスキルを中心とした具体的な養育行動を測定できる尺度がない現状を背景としている。本研究では，CAREの内容

を踏まえた項目をもとに作成した試行的な尺度の信頼性を検討し，今後の課題についても検討したい。

Ⅱ．方　法

2014年から2016年に，A県で実施された里親を対象としたCAREの研修時に調査の依頼を行い，事前・事後のデータを得た。対象や具体的な手続きについては以下の通りである。

対象）2014年から2016年にA県で実施された里親向けの研修会に参加した母親40名と父親22名の合計62名。母親の平均年齢は47.1 歳（29歳から60歳），父親は48.3 歳（33歳から64歳）であった。里子の平均年齢は，3.7 歳であった。なお，事前事後の比較研究は，3 回目までの質問紙調査に協力してくださった31名を対象とする。

手続き）行政における里親向け研修にとりいれられたCAREプログラムの実施を 3 回に分けて行った。1 回目と 2 回目はCAREの内容にそった研修の実施，3 回目はフォローアップで各 2 時間ずつの研修時間をとった。調査は以下のように 3 回行っているが，本研究では，事前である 1 回目と，終了後 3 か月時点の 3 回目の結果について報告する。

1 回目調査：CAREプログラム実施前（ 1 回目の開始時間前に実施，その場で回収）
2 回目調査：CAREプログラム終了後，約 1 ヶ月（研修時に配布，郵送にて回収）
3 回目調査：CAREプログラム終了後，約 3 ヶ月（郵送にて送付，回収）

具体的な手続きは，研修に先立って，研究の目的や方法などの説明を行い，質問を受けた上で調査を行った。また，あわせて同意書にも記入をお願いした。また，1 回目の研修と 2 回目の研修では，終了時にCAREダイアリーという用紙を配布し，里子との間で使ってみた場面やどのように用いたか，どのような点がうまく用いることができたか，どのようなところが難しかったかなどについて，任意の記録を依頼し，次回参加の際に持参してもらった。これは研究のデータとして直接活用するわけではないが，こうした記録をつけてもらうことにより，少なくとも 3 回にわたる研修期間中は，家でもスキルを思い出して里子とのやり取りに活用できることや，次の研修会の際に振り返りを行い参加者間でも共有することで，里親同士が共通の話題でつながりやすく，またお互いの知恵や工夫を知ることもできるといったメリットがある。また，研修の中で誤解していたことの修正ができることもあり，心理教育による実践においてはこうした参加者同士の交流も図りつつの振り返りが非常に有効であると考えている。

調査の内容）

研修への参加による変化や効果の検討のために行った調査は，以下の通りである。

・PSI-SF（Parental Stress Index-Short Form）親の養育ストレス短縮版（Abidin, 1999）：PSI-SFは，PSI全120項目から選別された19項目の尺度と36項目の 2 種類の尺度があるが，本研究では，英語オリジナル版に沿った36項目からなるPSI-SF日本語版（加茂, 2016）を用いている。その理由は，わが国独自の尺度として19項目が標準化されているが，3 歳以下のこどもが主な対象であるため，本研究の対象に適さないこと，一方，英語オリジナル版に沿った36項目は，関係を築きにくい子どもと親との関係性を，親の養育能力の損傷感と抑うつ気分を査定する「親の苦悩」, 満足できない親子の交流について評価する「親-子相互作用機能不全」，子どもの行動特性を評価する「むずかしい子ども」という 3 因子でとらえることができ，里親里子の関係を把握するのに適しているためである。日本国内では標準化に向けて，ECBIなどとの関連を含めて尺度の妥当性および信頼性について検討がされつつある（加茂, 2016）。

・親の養育行動と関係性認知：CAREで扱われるコミュニケーションなどの養育行動を図るために12項目からなる尺度を作成した。これは「その子どもと気が合わないと思うことがある」など，里親子の関係性を問う項目に加え，「私は，その子どものよい行動を具体的にほめている」，「その子どもに大きな声で命令することがある」など，CAREプログラムの中で具体的に扱う，親の肯定的な養育行動，否定的な養育行動を問う項目からなる。「まったくない」から,「よくある」まで 5 段階評価で尋ねている。この尺度はいまだ試行的な段階であるため，本研究では，信頼性の検討を行い，今後の尺度完成のための基礎データとしていくことを目的とする。

このほかに，子どもの問題行動についてECBI（Eyberg Child Behavior Inventory）を用いて尋ねたが，先述の通り，本稿では特に前後の比較は親のストレスと関係性への認知に焦点をあてて分析を行う。

・2 回目，3 回目の調査で行った，上記以外の調査内容：

2 回目　プログラムの満足度

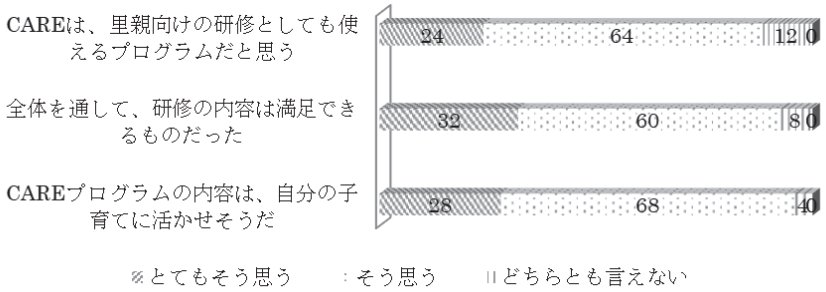
3 回目　CAREのスキルを意識した頻度，スキルの定着度と役立ち度，希望する研修の実施回数，プログラムの満足度，全体を通しての自由記述など

Ⅲ．結果と考察

１．プログラム全体への満足度，実施回数への希望

CAREプログラム全体の評価について，里親向け研修としても使えるプログラムかを尋ねたところ，9 割近くが肯定的な評価をしていた（「とてもそう思う」24％，「そう思

う」64％）。また，研修内容は満足できるものだったと答えた人は，9割以上であった（「とてもそう思う」32％と，「そう思う」60％）（図1）。



単位：％

図1　CARE全体への満足度と活用可能

さらに，自由記述からは，「実生活でやってみようということがたくさんあった」，「ロールプレイで子どもになってみて，みえることもあり気付かされた」などのように，実際に体験することで，里子との関係作りに役立てそうだという感想が多くみられた。また，「前週の研修の効果を他の参加者から聞けたのがとてもよかった」，「研修内容も子にとって役立つと思ったが，同じように悩む里親さんと交流できたこともありがたいと感じた」などといった声も複数みられた。同じメンバーでの複数回の研修なので，実際の里子とのやりとりを踏まえて，次の回にグループ内でそれを共有する機会がある。プログラムで習得した共通の知識や情報をベースに，里親自身の里子とのかかわりが具体的に語られ，情報交換の場にもなっており，里親同士の交流の場としての機能も果たしていることが伺える。

次に，研修の実施回数については，1回のみの実施を希望する人はおらず，どの里親も複数回の実践が必要であると感じていた。今回のように内容を2回にわけて1回はフォローという形式を希望する声がもっとも多く，「忘れてしまうことも多いので，複数回行った方がよいと思う」など，複数回の実施を行い，さらにフォローアップを希望する声も多かった（図2）。

また，「どういう場面でどう使うかについて，もう1日研修があれば良いと思った」，「任意の講習会があればまた受講したい」，「忘れてしまったころに，希望者のみフォローを受けられると，更に習慣として強化されて良い」など，3回以上の研修を希望するといいと感じている里親も2割程度いることが示された。こうした実践は定着が課題の1つでもあり，その意味でも複数回のフォローアップ研修など，様々な工夫が大切であると考えられる。

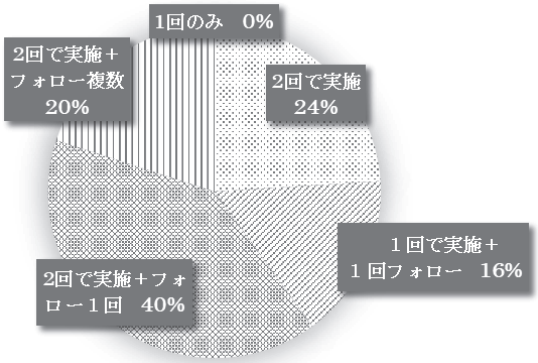


図2　希望する研修の回数

２．CAREを意識した頻度

次に，終了後 3 か月時点でCAREがどのくらい役に立ったか尋ねた結果，図 3 に示すように, 約 7 割以上の人が「とても役立った」または「役立った」と答えていた（図 3 ）。また,「どちらともいえない」と答えた人の中には既に知っていたという理由も複数あった。里親・里子の関係づくりにおいて，CAREのようなペアレントプログラム用いることは， 3 か月ほどの時間が経過した後もある程度意味があることが示唆されている。

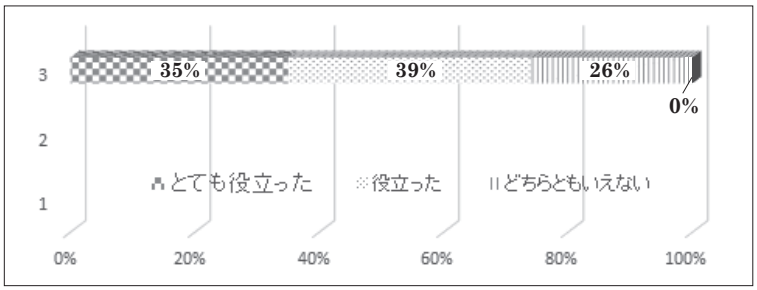


図3　CAREの役立ち感

図 4 は，終了後 3 か月の時点でCAREを意識した頻度について尋ねた結果である。CAREは大人だけを対象としたプログラムであるため，研修に参加後の里子との生活の中で，どのくらい意識して用いるか，という点が大切である。フォローアップ研修は，実生活で使用したことを振り返り，日常生活で意識することに役立つ面があるが，それも終わるとあとは里親の意識次第ということになる。図 3 から示される通り， 6 割前後の人が数日に 1 回は意識していたと答えている。一方で,「たまに」，もしくは「全く意識しなかった」と答えた里親も 3 割以上いることから，日常生活の中で意識することは

容易でないこともうかがえる。研修では，最も大切な3つのP（子どもの言葉をくり返す，行動を言葉にする，具体的にほめる）を視覚的にも思い出せるようなマグネットを配布して活用してもらったり，前述のようにCAREダイアリーに子どもとのやり取りを記録し，研修期間中もそれに基づいたやりとりを行ったりしている。参加者の感想には，「こちらが心を落ち着かせて信じて待つことの大事さを実践してみて改めてわかった。そう思っていてもできていなかった！　3つのPとK,10の指示の出し方を目に見えるように貼っておきたい」といった声も複数あり，こうした工夫も大切であることが伺える。

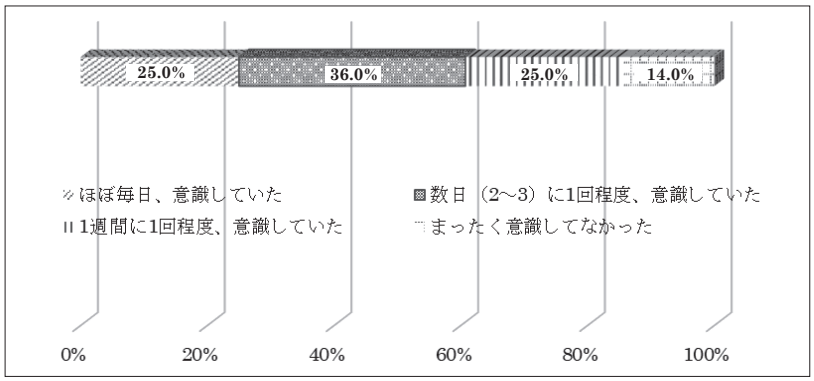


図4　CAREのスキルを意識した程度

３．里親の養育ストレスの事前事後の比較

次に，3回の研修の事前および，3か月後の事後の2時点における調査から（n＝31），PSI-SFを用いて養育ストレスの得点を比較した（対応のあるｔ検定）。その結果，週に2〜3日以上（ほぼ毎日，もしくは2〜3日に1回程度）CAREのスキルを意識していた群（n=19）では，「親の悩み」以外，「親-子の相互作用機能不全」，「むずしい子ども」および「ストレス全体」のいずれの得点においても，3か月後に得点が低下していた（表1）。一方，あまり意識しなかった（週に1回程度，もしくはまったくしなかった）と答えた群（n=12）では，いずれにおいても有意な変化はみられなかった（表2）。

具体的にみると，「むずかしい子ども」は“私の子ども（里子）は，小さなことにも腹をたてやすい”，“私の子ども（里子）は，他の子どもより手がかかるようだ”などの項目からなっており，こうした里子への否定的な認知がより肯定的になっていることが示された。また，“この子のために何かする時，この子にはあまり喜ばれていないと感じる”などの「親-子の相互作用の機能不全」も改善傾向を示していた。

以上より，研修に参加後も日々の里子とのかかわりの中で習得した内容を意識することによって，里親里子の関係がより改善されうること，さらにこうした肯定的な認知が

里親のストレスの軽減にもつながっていることが示唆された。

表１　親ストレスの変化（CAREを意識した群）

	実践前(SD)	3か月後(SD)	t値
親の悩み	27.69(6.71)	27.15(7.09)	0.58
親−子の相互作用機能不全	24.31(5.67)	21.46(5.58)	2.62*
むずかしい子ども	30.46(9.26)	27.23(9.00)	3.13*
ストレス全体	82.46(20.15)	75.08(21.47)	3.39**

*:p<.05
**:p<.01

表２　親ストレスの変化（CAREを意識しなかった群）

	実践前(SD)	3か月後(SD)	t値
親の悩み	27.83(7.71)	28.75(10.49)	−0.71
親−子の相互作用機能不全	22.33(7.23)	23.75(7.61)	−1.15
むずかしい子ども	29.00(13.77)	30.75(13.54)	−1.16
ストレス全体	79.17(20.56)	82.75(21.51)	−1.22

一方，こうした変化に関連しうる，里親のCAREへの意識化の程度は，里親の年齢，性別，里親としての経験年数，参加前のストレス得点などによる有意な差はみられなかった。里親家庭では，里子の状況によっていろいろな状況が予想されるが，今回はそのような里子の要因や里親里子関係の詳しい状況に関するデータを得ていない。この点は，今後さらに詳細な検討を行う必要があるだろう。

また，プログラム参加から3か月近くという時間を経る中で，日常生活でそれぞれの里親がどのように意識をする瞬間があったかなどの詳細についても尋ねることはできていない。生活の中で思い出してもらうためにもということで，CAREのスキルがイラストになったマグネットを配ってはいるが，それ以外の工夫も含めて，生活の中でどのように思い出してもらい，いかに意識的に使うことを促せるかなど，今後さらに検討が必要である。

４．３か月時点での自由記述から

CARE研修実施後3か月時点の調査時に得られた自由記述の内容をみると，まず研修全体に対しては，「最近は，ネットなどでも色々参考になるが出ているが，育児について学べる場所はあまりないので，同じ状況の人が集まって具体的なスキルを学べるのはあ

りがたいと思う」といったコメントに加え,「忘れてしまったころに，希望者のみフォローを受けられると，更に習慣として強化されて良い」といった具体的な実践への要望なども寄せられた。

また，里子との関係に関連して,「色々な状況下で冷静になれることが増加したように思う」「CAREを意識したことで，子どもに対してイライラすることが減った」「信頼関係が強くなった。少しではあるが，ためし行動が減ってきた」など，変化に関する記述が多く寄せられている。さらに,「自分の考えていること，伝えたいことはすべて伝わっているという前提で考えていたが，そうではなく，もう一工夫が必要なことがわかった」「必ず実行に移せているわけではないが, 思い出しては実行している感じ。…会社での人間関係においても役立っている」など，改めて自分の子育てを振り返ったり，子育て以外の場でも活かせる可能性を感じたりといった感想もみられ，里子との関係づくりにある程度有効であることが伺える。

一方,「子どもの成長によってCAREが生きるときと，反抗的で何を言っても難しいときがあり，明確にはいえないが，より小さなお子さんには大変CAREは有効と考える」「里子の心にひびくのが何年後になるのか，また，ひびきを期待してはいけないのかは悩ましいところ」といった声にみられるように，子育て一般に共通する苦労に加えて，里親ならではの難しさや苦労を改めて気づかせる感想も少なくなかった。里親同士の交流やサポートになりうる多様な機会が大切であろう。

５．親の養育行動と関係性認知の尺度の検討

最後に，今回新たに作成を試みたCAREで扱うコミュニケーションスキルを反映した養育行動と関係性認知の尺度の検討を行った。まず，因子分析を行ったところ，表 3 のような結果になり， 3 因子が適切であることが示された。第 1 因子は里親と里子の否定的な関係性を示す内容からなっているので,「子どもとの否定的な関係性」と命名した。第 2 因子は, 子どもに対して大声で命令するといった親の養育行動を示すものなので「子どもへの否定的な養育行動」と命名した。第 3 因子は, 子どものよい行動に気づいたり, 具体的にほめたりという親の養育行動を示すものなので,「子どもへの肯定的な養育行動」と命名した。各因子の α 係数は，因子 1 が， α =.865，因子 2 は α =.805，因子 3 は α =.796で，ある程度の信頼性を満たしていることが示された。

また，PSI-SFとの関連を検討したところ,「否定的な関係性」は,「親-子の相互作用機能不全」,「むずかしい子ども」といった意識と有意な相関が示された。「否定的な養育行動」は，親自身の悩みが高いこととは関連しないが,「むずかしい子ども」であるという意識とは関連を示しており，こうした認知の強さと実際の否定的な養育行動のあいだに関係があることが示された。

それに対して，肯定的な養育行動は，悩みやむずかしい子どもであるといった意識と

の間に有意な相関は示されなかった。このことから，子どもに対する肯定的なコミュニケーションは，親側のストレスの高低そのものと関連するのではなく，むしろスキルの定着などの要素が関係することも予想される。ただし，今回はあくまで試行的な尺度の開発段階であるため，今後さらに修正を加えた上で，基準関連妥当性をはじめとした尺度の検討を行いつつ，こうした具体的な養育行動の変化を検討することが課題である。

表３　親の養育行動と関係性認知の尺度の因子分析

	因子		
	1	2	3
私は、その子どもと気が合わないと思うことがある	.833	.347	−.170
その子どもは、私の言ったことをきかない	.756	.269	−.060
私は、その子どもに対してどのように接したらいいか、悩むことがある	.693	.326	.153
その子どもは、態度が反抗的なことがある	.577	.300	−.067
私は、一日に何度もその子どもを叱っている	.349	.873	−.169
私は、その子どもに大きな声で命令(指示)することがある	.321	.832	.046
私は、その子どもに対して腹が立つことがある	.341	.772	.122
私は、その子どものよい行動を言葉にして伝えている	−.131	.063	.877
私は、その子どものよい行動を具体的に褒めている	−.227	−.016	.791
私は、その子どもがよい行動をとったときは、それに気づいている	.111	−.001	.608
私は、その子どもの言葉にきちんと耳を傾けている	.300	−.007	.389
その子どもが言うことを聞かずにダダをこねると、私は、自分の方が折れてしまう＊	.123	−.231	.313
寄与率(%)	30.80	51.86	65.37
α係数	0.865	0.805	0.796

＊は、削除した項目

Ⅳ　まとめと今後の課題

里親と里子の関係づくりにおいて，コミュニケーションに焦点をあてた心理教育的介入プログラムであるCAREの効果について検討した結果，里子の子育てにおいて，ある程度役に立つプログラムであること，また，日々の生活の中で意識することによって，里子との関係づくりにも効果を持ちうることが示された。庄司（2003）が指摘するように，本来公的な役割であるはずの社会的養護が「個人的な養育」にのみ任されないためにも，里親自身が日々の具体的なかかわりや対応方法について実践的に学べることは重要であり，その際に，こうしたプログラムを用いた研修なども意味があると考えられる。互いに共有していない過去の経験を補いつつ，里子たちとの今と向き合う努力をしている里親にとって，具体的で用いやすいスキルを共有しつつ，里親という同じ立場の人たちと学びあう機会をもてるという点でも，このような取り組みは重要であるといえるだろう。

一方で，里子の養育にあたっては，数回の研修に参加することだけで，その効果を持続させることは難しい面もある。日常生活における意識の度合いが，その後の親自身のストレスや子どもとの関係の認知に影響しうるという本研究の結果は，研修の場での学びをいかに日常に生かしつつ継続的に活用しうるかということの重要性と難しさも示している。こうした活用を長期的に維持しやすい状況，そのために可能な工夫など，里親，里子双方の要因を視野に入れつつ，プログラム参加による関係性向上のための課題が精査されることも必要だろう。特に継続的なフォローアップの機会を設けるなどによって，里子の状況に即しながらの取り組みも大切である。近年，里親による養育の重要性が指摘されている中で，里親・里子の状況やニーズに即した長期的かつ丁寧な支援的かかわりを提供していくことが，今後，ますます重要と考えられる。

＜付記＞

本研究にご協力くださった里親の皆様に心から感謝いたします。

本研究の実施は文部科学省科学研究費（基盤研究C　課題番号：26380961）の補助を受けた。

引用文献

・安藤藍（2010）里親経験の意味づけ―子どもの問題行動・子育ての悩みへの対処を通して―家族研究年報　35,43－59.
・福丸由佳（2010） CAREプログラムの日本への導入と実践―大人と子どものきずなを深める心理教育的介入プログラムについて―白梅学園大学短期大学　教育福祉研究センター研究年報14 23～28.
・福丸由佳（2011）里親に向けた心理教育的介入プログラムCAREの実践　白梅学園大学紀要47号　1 -14.
・福丸由佳（2013）子どもと大人の絆を深める心理教育プログラムCAREの実践と効果研究平成22年度~24年度科学研究費補助金　研究成果報告書
・加茂登志子（2016）日本語版ECBIアイバーグ子どもの行動評価尺度　使用マニュアル　千葉テストセンター
・木村容子（2007）子どもの福祉の視点たつ里親制度のあり方に関する研究 京都光華女子大学研究紀要　45　329-348.
・三輪清子（2016）なぜ里親制度は伸展しないのか―里親登録者不足仮説と里親委託児童限定仮説　社会福祉56（４） 1 -13.
・尾里育士（2015）社会的養護に関する考察　里親制度に焦点を当てて　純心人文紀要　21 37-48.
・Gurwitch H R., Messer E P., Masse J., Olafson E., Boat W B .,Putnam W P.,（2015）Child-Adult Relationship Enhancement（CARE）：An　Evidence-informed program for children with a history of trauma and other behavioral challenges. Child Abuse & Neglect 53. 138-145.
・Messer E P., Gurwitch H R., Boat W B ., Olafson E., Dougherty, S., Warmer-Metzger C., Putnam W P., Connelly L., Thieken L., Sharp D.,（2016）Child-Adult Relationship Enhancement（CARE）：A Carriculum Guide for Trainers. 3 .（日本語版監訳　福丸由佳）
・佐藤隆司（2009）里親制度と児童相談所－里親と協働する里親制度　子どもと福祉　2 26-31.
・三鈷泰代（2008）幼児期の子どもを持つ親の養育スキルに関する研究　発達研究　22.181-190.
・田中久子（2008）社会養護としての里親制度の役割と限界―里親制度と養子縁組制度の比較を通じて　獨協ロージャーナル３　89-124.
・湯沢雍彦（2004）里親制度の国際比較　ミネルヴァ書房
・渡邉守（2010）子ども中心の里親ソーシャルワーク確立を目指して　子どもの虐待とネグレクト　12（１）99-107